【報　告】

マルチメディアを用いた地域連携のプラットフォームづくり 1
～家政福祉を基盤とした保育士養成～

弓削田綾乃、丸谷充子、佐藤有香、大沼良子、庄司妃佐、二宮祐子、池谷真梨子、飯村愛

Constructing a platform collaborated the community by using multimedia : Part 1
～ Training of childcare workers based on home economics and social welfare ～

YUGETA Ayano, MARUYA Mitsuko, SATO Yuka,Onuma Yoshiko,SHOJI Hisa,
NINOMIYA Yuko, IKEYA Mariko, IIMURA Ai

要旨

本稿は、2020年度から3年計画で進めている児童福祉コースの取り組みについての経過報告である。設置3年目を迎えた和洋女子大学家政学部家政福祉学科児童福祉コースは、保育・福祉・家政の専門性をそなえた保育士養成を一貫して目指してきた。その多彩な学びの集大成として、プロジェクトでは、マルチメディアを用いた地域連携のプラットフォームの構築に取り組んでいる。具体的には、障害の有無や年齢、性別等にかかわらず、一人一人が輝けるインクルーシブな場を、児童福祉コースの科目間で連携を図りながら、学生主体で創り上げていき、最終的にユニバーサルダンスの創造と発表を目指す。

このプロジェクトは、2020年度と2021年度に和洋女子大学教育振興支援助成を受けており、最終年度を2022年度と想定している。本稿で、2020 ～ 2021年度前期までの活動状況を整理し、今後の方向性を示したい。

キーワード：家政福祉、保育士養成、保育・福祉・家政、マルチメディア、地域連携のプラットフォーム

はじめに

和洋女子大学家政学部家政福祉学科に児童福祉コースが設置されて、2021年度で3年目を迎えた。本コースの大きな命題は、保育・福祉・家政の専門性をそなえた保育士を養成することである。母体となる家政福祉学科では、豊かで安心できる社会の創造をめざして、衣・食・住、社会福祉、家族・消費生活、そして保育について体系的に学び、専門性を深めていく学びが展開されてきた。そこで、本コースに在籍する学生が、保育・福祉・家政の有機的なつながりを実感できる3年間のプロジェクトを立案し、2020年度から開始した。

このプロジェクトには、専門教育科目の垣根を超えて連携するための方法が必要であった。また、地域の方々との交流について対面以外での方法を含めて模索する必要もあった。これらを解決するために着目したのが、マルチメディアの活用である。「児童福祉コースの学生が主体となり、多様な人が輝ける場

和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科

のプラットフォームを、マルチメディアを活用しながら構築していく」ことを骨子とし、その過程で多くの学びが得られる取り組みを考えた。本稿は、こうした児童福祉コースの取り組みの経過報告として、2020 ～ 2021年度前期までの状況を整理し、今後の方向性を明示する。なお、初年度の2020年度は、本コースである保育士養成課程が開設されて2年目であるため、最高学年が2年生であった。2021年度の最高学年は3年生である。

本研究は2020年度と2021年度に和洋女子大学教育振興支援助成を受けており、最終年度は2022年度を想定している。

１．プロジェクトの概要

1－1．理念・目標・方法

本プロジェクトは、家政福祉学科児童福祉コースの特徴である保育・福祉・家政の学びの成果を、学生が実感できる活動を行いたいというコース専任教員一同の願いからスタートしたものであり、これがプロジェクトの根底にある理念でもある。

これを受ける形で、児童福祉コースをプラットフォームとしたインクルーシブな場づくりという取り組みを構想した。これは、障害の有無や年齢、性別等にかかわらず、一人一人が輝ける場を、学生主体で創り上げていくというものである。立案にあたって重視した点は、学生の主体性、科目間の連携、創造的活動、地域の方々との交流等である。そして最終的に、地域を巻き込んだユニバーサルダンスを創造し発表することを目指すこととした。

この最終目標に到達するための方法として着目したのが､マルチメディアであった。情報端末やICT（情報通信技術）等を活用することで、情報の収集・整理・共有、双方向授業、科目間の連携、コンテンツ制作等を効率的に進められると考えたのである。そのため本プロジェクトでは、学生が使用できるタブレット型情報端末を購入することにした。プロジェクトに携わる科目として想定したのは、２～ 4年次の専門教育科目である「障害児保育Ⅰ・Ⅱ」「保育内容の指導法B」「保育内容　表現」「こどもの生活と遊びD」「保育者論」「子育て支援」「保育実践演習」等である。

また、コンテンツ制作や福祉系ダンスなどに精通する講師を招いてのワークショップや、学外での商業公演の鑑賞等の計画も組み込んだ。

1－2．期待できる教育的効果

全期間を通した主な教育的効果として、次の3点を期待している。

（1）保育士の資質に関わる能力の育成

本プロジェクトは、保育・福祉・家政の学びを習得した保育士の養成、少人数制の教育、教員の多様な専門性といった本コースの特性が十分に活かされると考えられる。学生には、多彩な学びを統合させる充実した時間を提供するだけでなく、問題解決能力・実行力・コミュニケーション力・責任感・感受性を育み、将来、保育施設、児童養護施設、障害児施設、母子生活支援施設など様々な場で活躍する力の基礎を培うと考える。

（2）情報教育

情報に関する正しい知識と技能は、現代社会において必要不可欠な能力である。本プロジェクトは、全

般でマルチメディアを活用する。たとえば携帯可能なタブレット型情報端末は、保育現場でも活用が広がりつつあるツールであり、学生のスキルアップに欠かせない。またプロジェクトでは、多様なバックグラウンドをもつ複数の他者との協働作業も経験する。情報リテラシーもそなえた、マルチメディアの機能と汎用性に関する知識と技術を備えた人物を育てうるものと考える。

（3）家政福祉学科児童福祉コースならではの教育プログラムの構築

家政福祉学科が提供する学びの多彩さは、学生によっては、何を学んでいるのかわからなくなったり、進路に迷ったりする事態を生じさせるかもしれない。そこで、本プロジェクトで共通のゴールまでのプロセスを辿り、協働することで、学びの成果を実感できると期待する。そしてこれは、児童福祉コース独自の教育プログラムとなる可能性ももっていると考える。

２．1年目 ―― 2020年度の取り組み

2－1．計画の変更と実施状況

2020年度は、スタート時から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を大きく受けた。特に前期は全て遠隔授業となり、学内外での集合活動は実施困難となった。後期は、必要に応じて対面授業が実施されたものの、本プロジェクトで想定していた科目のほとんどが遠隔授業となった。それに伴い次の三つの点について、大幅に変更せざるを得ない状況であった。

一つ目は、科目間の連携についてである。諸々の判断が難しい状況が続いたため、「ICTを活用した双方向授業づくり」と、それによる「ICT技術とディスカッション能力の向上」を当面の課題として、教員が個々に可能な範囲で取り組んだ。限られた条件下であったが、次年度以降の本格的な機器活用に向けての布石が敷けたと考える。

二つ目は、タブレット型情報端末の準備についてである。当初は、この機器を10セット購入し、児童福祉コース2年生の演習・講義において、数名で1台を共用する予定だった。しかし、コロナ禍の感染予防に伴い用具の共用が難しくなったため、その購入台数を13セットに増やし、次年度購入分とあわせて、できる限り共用せずに済むようにした。

三つ目は、商業公演の鑑賞と外部講師を招聘した集合型ワークショップの計画である。この計画については、学生や招聘講師の状況、社会状況などを鑑みて見送った。そのかわりに、ユニバーサルの視点で様々な身体表現に関する複数の教育コンテンツを視聴し、レポートによって各自の学びを深めた。

こうした状況で、学内で使用するクラウド型教育支援システム（manaba）やWeb会議システム（Zoom）等の各種インターネット上のシステムやコンテンツを活用する機会が格段に増えた。その結果、学生と教員の双方において、マルチメディアの活用に必要な情報リテラシーの向上がはかられたと考える。

2－2．2年生の授業での事例

事例として、前期「保育内容　表現」と後期「こどもの生活と遊びD」（担当：弓削田綾乃）について報告する。

前期の「保育内容　表現」は児童福祉コースの必修科目で、20名が履修した。履修者は、アプリケーションやコンテンツを活用した表現方法について調べ、レポートし、ディスカッションして学びを深めた。また、各自が写真や動画を撮影して提出するとともに、それらのデータを共有して映像作品を編集することにも挑戦した。成果としては、映像作品『みんなの写真集』『みんなのパプリカダンス』『みんなの物語～

るるちゃんの冒険』を制作するに至った。

これを引き継ぐ形での実施となった後期の「子どもの生活と遊びD」は、主にZoomを用いて、ダンスや音楽、物語等を、ユニバーサルの観点から創作するという課題に取り組んだ。この科目は選択科目で、履修者は11名だった。その成果として、乳幼児を対象に身体表現をファシリテートする『音と絵本～いろいろな音と一緒に“スイミー ”の世界を体験しよう』という一連の活動を創り上げた。

以上のように、前後期を通して、従来の教育活動を行うのが困難な状況であったものの、学内のIT環境に即した「アプリケーションの理解と実践」「ICTでの共同作業」「創造的身体表現」「福祉の視点からのファシリテート」を実施できたと考える。

科目間の連携については、ほとんどが遠隔授業となったことで、複数の教員らにおける科目同士の連携は実現が難しかった。一方、事例で示したような、同じ教員の科目間では連携がとれていた。また、児童福祉コース教員の定例会議で状況を共有するように努めた。

３．２年目 ―― 2021年度前期の取り組み

3－1．実施状況

2021年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染状況が好転しない中でのスタートとなった。本学でも、実習科目や演習科目以外は遠隔形式をとる科目が多く、対面形式であっても感染対策を徹底する必要から、身体接触やグループワーク等の実施が難しい状況が続いた。また、前期の途中では、感染状況の悪化に伴い、対面形式から遠隔形式に変更せざるを得ない状況も発生した。しかしそのような状況下でも、学生も教員も大きな混乱はなく進められたと考える。何よりも、遠隔形式であれば、ディスカッション、グループワーク等が可能であったことから、遠隔と対面のそれぞれの利点を活かしたハイブリッド型の授業が展開された。

以上の授業運営の状況は、本プロジェクトにも影響を与えた。2021年度は、前年度からの課題であった「科目間の連携」による「ユニバーサルダンスに向けたコンテンツの制作」を主たる活動と位置づけ、進めてきた。まず児童福祉コースの1期生である３年生は、前期の保育士資格必修科目「障害児保育Ⅱ」と「保育内容の指導法B」において、障害の特性やインクルーシブについて学び、障害の有無にかかわらず共に楽しめる身体表現を模索し、「影絵劇」のコンテンツ制作に挑戦した。前年度に現3年生が2年次に取り組んだコンテンツは、児童福祉コースのみでの公開としたが、3年次に取り組んでいるコンテンツは、2021年度後期に学外への公開を計画しており、そのためのリテラシーにも注意を払いつつ進めている。

また２期生となる2年生は、「保育内容　表現」において、後期ならびに次年度につながる課題に取り組んだ。前年度と異なるのは、対面形式になった点である。

以上の３年生・２年生の取り組みにおいては、前年度から継続して、情報端末を用いてmanabaやZoom等の各種インターネット上のシステムやコンテンツを活用した。また、連携する科目の担当教員間では、ICT上で情報共有・データ共有し、授業内容に反映させるようにした。なお、2021年度にタブレットを6台追加購入し、後期以降に学外者と交流を試みる際に使用できるよう、セットアップを進めてきた。

3－2．3年生の授業での事例

「障害児保育Ⅱ」（担当：丸谷充子）では、２年次の「障害児保育Ⅰ」での様々な障害についての基礎的な学びを基に、実践的に学びを深める。障害の有無にかかわらず、誰もが個々の違いを認め合いながら共に成長するインクルーシブ保育の学びを深めるため、聴覚障害児と健常児が共に楽しめる歌や踊りなどの

集団活動を考えた。遠隔授業であるためmanabaの機能を活用して情報の共有や意見交換を行った。初めにそれぞれがインターネットなどを使って障害のある子ども達の遊びや活動に関する映像や文献など情報収集して共有した。次に、各自３歳～５歳児を対象に、5分～10分程度の集団活動案を考えて共有し、他の人の活動案を見て学び、感想を述べ合い、さらに工夫を重ねて各自の活動案を完成させた。インクルーシブな身体表現活動のまとめとして、「保育内容の指導法B」で制作している影絵劇を対面で行う場合を想定して、聴覚障害のある乳幼児と保護者に対する配慮を考えた。

この学びを実践につなげる授業が、「保育内容の指導法B」（担当：佐藤有香）である。この授業では、乳幼児期の発達に即して深い学びが実現する学びの過程を理解し、具体的保育場面を想定した保育の構想、指導方法について学んだ。この授業の後半では、実際の保育場面で子どもが「影絵劇」の活動を行うことを想定し、計画を立案、実施、評価、反省を通して保育を構想、指導する方法について学修を進めた。ここでは、学生に「障害の有無にかかわらず、全ての子どもが楽しめる」という視点から、「影絵劇」を上演するまでの過程を考え、創作に取り組んだ。題材は、２年次に創作した「クラゲの物語（少女が、クラゲに導かれて海の世界を冒険する物語）」である。また、「影絵劇」の上演までの一連の流れの中で、学生が、スケジュール管理、庶務、取りまとめ等、各自役割を担い、IT上で情報共有、意見交換を行いながら、活動を進めた。この授業で完成させた「影絵劇」については、動画撮影を行い、後期期間中に配信用映像コンテンツを制作予定である。

3－3．2年生の授業での事例

「保育内容　表現」（担当：弓削田綾乃）では、人が発する表現とは何であるのかを考えるために、身体を介して多様な人やモノと出会う体験を積み重ねた。そのプロセスと意義を丁寧に追うことによって、表現とは内的世界を外に開放することであり、その原点は心が大きく揺さぶられる経験にあるということへの気づきを促した。また、他者との表現の共創を通して、表現と表現の出会いが新たな表現を創出することも学んだ。こうした創出は、人間関係や社会的課題等への取り組みにも、変化をもたらす重要なものである。

以上のことから、本科目は、プロジェクトにおける地域の方々との交流やインクルーシブダンスの基礎作りととらえ、「みんなでつくるクラゲの展覧会と物語の創作」を最終課題とし、造形、音、身体等の表現の体験を重ねた。例えば、「クラゲ」を切り口に各自がテーマを決め、身近なモノを使って自分だけのクラゲ人形を制作した。また、音や絵本の世界で、水の中や空の上などを浮遊する感覚を味わう身体表現あそびを試みた。このようにして、自分が感じたことや、友人から刺激を受けたことなどをもとに、クラゲ人形を展示する背景づくり（A4 ～ A3サイズの台紙）と、土台づくり（南館プレイルームの壁面にカラービニールを貼り付け）に取り組み、「クラゲの展覧会」を完成させた。その後、クラゲ人形が登場する物語のリレー形式での創作と、活動を振り返るドキュメンテーションの制作を行い、一人一人の学びについて考えた。

本科目は、個々の表現を扱うことが多かったが、後期の「子どもの生活と遊びD」に引き継ぎ、ICTを活用しながら表現を共創する機会を増やす予定である。

おわりに　－今後の取り組みに向けて－

家政福祉学科児童福祉コースで2020年度から3年計画で取り組んでいるプロジェクトについて概説し、2021年度前期までの経過を報告した。このプロジェクトは、大学の学びを軸に進めるため、新型コロナ

ウイルス感染症による諸変更は、プロジェクトの遂行に大きな影響を与えた。それゆえ、必ずしも計画通りに順調に進んでいるとは言えない状況ではある。

しかしながら、マルチメディアの利用という点では、それぞれの科目運営での活用、複数科目間での情報・データの共有などが該当し、ある程度は取り組めている。2021年度後期からは、地域の方々との交流も開始する予定である。さらに、初年度から繰り越されている実地研修とワークショップについても、実施が難しい場合は、配信型ないしは遠隔型に切り替え、年度内に実施する方向で進めていく。

プロジェクトを総括する2022年度には、「わようユニバーサルダンス」を軸にしたプラットフォームの構築に向けて進捗状況を検討しながら、柔軟かつ計画的に取り組んでいきたい。

弓削田綾乃（和洋女子大学 家政学部 家政福祉科 准教授）
丸谷　充子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉科 准教授）
佐藤　有香（和洋女子大学 家政学部 家政福祉科 准教授）
大沼　良子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉科 教授）
庄司　妃佐（和洋女子大学 家政学部 家政福祉科 教授）
二宮　祐子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉科 准教授）
池谷真梨子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉科 助教）
飯村　　愛（和洋女子大学 家政学部 家政福祉科 助手）

（2021年10月12日受理）